

修士論文（要旨）

2019年1月

日本語学習者の学習意欲に関する実証的研究
—多様な言語文化背景の日本語上級学習者を対象に—

指導 宮副 ウォン 裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

217J3003

坂田 恭一

Master's Thesis(Abstract)
January 2019

Empirical research on learning motivation of Japanese learners:
For Japanese Advanced Learners with Various Language and Culture
Backgrounds

Kyoichi Sakata

217J3003

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第1章 序論	
1.1 研究背景	1
1.2 研究目的・意義	2
第2章 先行研究	
2.1 これまでの学習動機研究の流れ	3
2.2 日本語学習における学習動機について	4
2.3 言語学習の情意面研究について	6
2.4 学習動機・意欲・動機づけ・モチベーションの用語の定義	8
第3章 調査概要	
3.1 調査方法	10
3.2 調査協力者	10
3.3 言語学習ヒストリー (LLHs) について	11
3.4 分析枠組み「7つの構成概念」について	12
3.5 「過程志向アプローチ」について	12
第4章 インタビュー調査結果と分析	
4.1 全体的な学習意欲の傾向	14
4.2 行動前段階	16
4.3 行動段階・行動後段階	18
4.4 アイデンティティの前景化	26
第5章 総合的考察	
5.1 上級話者の学習意欲維持の傾向	32
5.2 学習意欲の変容	34
5.3 多層的なアイデンティティと言語使用不安	37
第6章 まとめと今後の課題	
6.1 本研究のまとめ	39
6.2 本研究の限界と今後の課題	40

※参考文献

※巻末資料

近年のグローバル化により、ヒトやモノの移動が以前に増して活発になっている。その中で言語学習のニーズも学習法も多様化し、全ての学習者が教室内で日本語を学ぶとは限らない。必要な言語知識を学習者自身が自律的かつ主体的に選び、生涯学び続ける姿勢が求められてきているのではないだろうか。

言語の学習に限らず、何かの目的のために努力を続けることは重要である。現在日本で日本語を学ぶ学習者は非常に多いが、必ずしも学習者全員が日本語上級者の水準に到達できるわけではない。日本国内で学習し、母語話者との接触場面も多様で豊富な学習者が日本語上級話者のレベルになるには、どのような要因が関係しているのだろうか。

本研究では学習者の日本語学習歴を振り返り、学習動機付け、学習意欲の推移と変化に関して実証的に分析・考察することを目的とする。研究課題として以下の2つを設定した。

(1)日本語上級話者はどのように学習意欲を維持しているのか。

(2)日本語上級話者の学習意欲の変容には、どのような傾向があるのか。

分析・考察は Shoab & Dörnyei(2004)の「動機構成概念の7つの局面」を理論的枠組みとして援用する。本研究の研究課題の解明のためには、次の5つの領域の先行研究を概観・考察することが不可欠であると考え、(1)第二言語習得、(2)言語の社会化、(3)学習動機、(4)言語学習ヒストリー(Language Learning Histories、以降 LLHs)、(5)アイデンティティの前景化。さらに本研究において使用する「学習意欲」の用語の定義に関して、類義の用語「学習動機」、「動機づけ」、「学習意欲」との使い分けについても言及した。

調査協力者は日本在住の日本語学習者8名である。全員日本の大学院に在籍しており、日本人と関わる機会が多く、学術レベルの日本語運用能力を有する日本語使用者であることが特徴と言える。協力者には2018年1月から3月の期間に1人1時間程度の対面での半構造化インタビューを実施し、これまでの日本語学習についてLLHsを意識した質的調査を行った。その後「動機構成概念の7つの局面」を援用し、意欲の維持、変容の要因とその際にとった行動等について分析、考察した。

調査の結果、学習意欲の維持には、「自己モニター能力」が強く影響し、メタ認知ストラテジーを駆使して日本語を学習・使用していることが学習意欲維持に重要であることが明らかになった。学習意欲の維持における「重要な他者」は、どの協力者にも共通して正の影響を与えた。だが例外として「友人」という存在は、類似した目標を持つ場合にライバル心を掻き立てることがあり、失敗のモデルケースとして自身に投影してしまうと、時に意欲に負の影響を与える可能性もあることが明らかとなった。学習の目標に終着点を作ることなく、常に目標を立てて学習を継続させる姿勢も学習意欲の維持に重要な影響を与えていることが示唆された。

学習意欲に変容を与える時機は、人生における大きな目標の達成により新たな目標を設定する際、同時に日本語学習目的とゴールも変化する傾向が明らかとなった。個人の中には「教室内での自分」「教室外での自分」等のようにアイデンティティが常に複数存在しており、アイデンティティごとに目標設定や挫折が発生し、学習意欲や学習目的が絶え間なく変化する傾向がある。

この結果を踏まえ日本語学習において、以下の点を意識することが自身の「理想の日本語使用者」になるための近道であり、本研究の日本語上級話者である調査協力者には以下のような能力が備わっていたことが明らかとなった。

- ・自身に正の影響を与える「重要な他者」が周りでサポートしている。
- ・自身の学習を管理する「自己モニター能力」を意識して学習できる。
- ・大小様々な目標を立てて実行し、達成すると新たな目標を立てることができる。

・様々な学習ストラテジーを駆使して学習意欲を維持できる。

本研究では、日本語学習に特化した LLH（言語学習ヒストリー）収集を行った結果、日本語学習・日本語使用場面におけるアイデンティティの変容について多種多様で良質なデータを得ることができた。だが、本研究は日本に留学している上級日本語学習者を対象としており、母国での日本語学習経験、独学経験の有無など、変数には偏りがある。日本の大学院に留学しているという特徴的な変数の存在も否めない。今後は異なる社会文化的文脈における研究を積み重ねる必要があり、それらを比較検討した上で、学習意欲を向上させるストラテジー分析・考察し、研究成果を蓄積することが求められる。

参考文献

- 岩本尚希(2010)「外国語学習者の学習継続要因に関する一考察：言語学習ヒストリーから」『桜美林言語教育論叢』 pp29-43
- 大西由美(2014)「日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に」『北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 博士論文』
- 岡葉子(2017)「日本語教育学における「学習動機」の概念について—motivationの訳語をめぐる問題—」『留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学 43 pp19-32
- 桜井厚・小林多寿子(2005)「ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門」『株式会社せりか書房』
- 栗カシン(2013)「中国大連の大学生の日本語学習動機に関する調査—学年差と学習要因に着目して—」桜美林大学大学院修士論文
- 西口光一 (2005) 『文化と歴史の中の学習と学習者：日本語教育における社会的パースペクティブ』 凡人社
- 西部由佳(2009)「教室内外での出来事による学習者の『学習意欲』の変動とその背景となる心理的要因—『可能性の予期』」に注目して—」『小出記念日本語教育研究会』 17,21-32.
- 宮副ウォン裕子・吉村弓子・鹿目葉子(2009)「『国際間ヴァーチャル映画討論会』の活動とその成果—日本語教育・異文化コミュニケーション教育・日本語教師養成教育への示唆—」『第8回国際日本語教育・日本研究シンポジウム会議録』pp358-365
- 元田静 (2004)「第二言語不安と自尊感情の関係:日本語学習者を対象として」『言語文化と日本語教育』 28,pp22-28
- 山本晃彦(2014)「日本語学習者の学習意欲の変化とその要因」『拓殖大学大学院 言語教育研究科 博士論文』
- 吉川景子(2011)「タイ中等教育における日本語学習意欲を高める要因と学習行動との関係—日本語教師の日本語指導時の内発的動機づけ要因—」『国際交流基金バンクク日本センター 日本語教育紀要』 8, 75-84.
- 義永美央子(2009)「第二言語習得研究における社会的視点—認知的視点との比較と今後の展望—」『社会言語科学』 第12巻第1号,pp15-31
- 羅曉勤(2005)「学習者のモチベーションを研究する」『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ—』 凡人社 pp189-211
- Deci,E.L. & Ryan,R.M.(1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*, New York: Plenum
- Dörnyei,Z & Ushioda,E.(2001).*Teaching and Researching Motivation (Applied Linguistics in Action)*, Longman
- Gardner, R.C. (1985). *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitude and Motivation*. London: Edward Arnold.
- Diane Larsen-Freeman 他 (1995)「第二言語習得への招待」『鷹書房弓プレス』
- Krashen, S. (1985)*The InputHypothesis:Issuesand Implications*. London:Longman.

- Klamsch, C. (2003). *Identity, role and voice in cross-cultural (mis)communication*.
In J. House, G. Kasper, & S. Ross (Eds.) London: Pearson Education.
- Murphey, T. Chen, J. & Chen, L.C. (2004). *Learners' constructions of identities and
imagined communities. Learner's Stories, Cambridge University
Press. pp.83-100.*
- Ochs, Elinor (1996). *Linguistic resources for socializing humanity*. In Gumperz, John
J., & Levinson, Stephen C. (Eds.), *Rethinking linguistics relatively*. pp. 407-437
- Shoaib, A. & Dörnyei, Z. (2004). *Affect in lifelong learning: Exploring L2
motivation as a dynamic process. Learner's Stories, Cambridge University
Press, pp.22-41.*

「英語学習を挫折する理由、最も多い理由は「お金がかかるから」5人に1人が「2020
年に向けて英語を頑張りたい」と回答」, PR TIMES

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001742.000002581.html>

(参照 2019/1/28)